

学内広報

2018.3.26

no.1508



UTokyo FSI

The University of Tokyo
Future Society Initiative



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

未来社会協創推進本部について再確認しよう

FSIってなんだっけ?

学生支援プログラムもめきめき拡充中

東大アラムナイTopics 2017

"UTOKYO VOICES"に基づく連想クイズ15

この先生は誰だ!?

FSI

UTokyo
Future Society Initiative

「未来社会協創推進本部」について再確認しよう

ってなんだっけ?

UTokyo FSIの構成

未来社会協創推進本部

本部長：五神真 総長
副本部長：福田裕穂 理事・副学長
構成：科所長会議と同様

ビジョン形成分科会

分科会長：坂田一郎 総長特任補佐

学知創出分科会

分科会長：相原博昭 大学執行役・副学長

連携支援分科会

分科会長：光石衛 大学執行役・副学長
国際連携タスクフォース 社会連携タスクフォース
座長：沖大幹 総長特別参与 座長：松木則夫 理事・副学長

国際卓越教育分科会

分科会長：石井洋二郎 理事・副学長
国際化教育タスクフォース 国際卓越大学院タスクフォース
座長：羽田正 理事・副学長 座長：小関敏彦 理事・副学長

●FSIは、総長をトップに、科所長会議と同じメンバーで構成される全学体制として発足しました。SDGsを活用し、共通の未来社会ビジョンを学内外で広げるとともに、学際融合分野・新分野の創出、キャンパスのグローバル化、多様なセクターとの協働などを効果的に推進する仕組みです。

2017年7月に総長室の下に設置された未来社会協創推進本部（FSI）。その名はもちろんご存じでしょうが、実をいうと名前ぐらいしか知らなくて……という教職員がいては困ります。「他の本部とは何が違うんだっけ」「本部長は誰だっけ」「SDGsってなんだっけ」「登録プロジェクトってなんだっけ」……。年度が変わるこの時期に復習しておきましょう。

次の70年へ（UTokyo 3.0）



●指定国立大学法人に指定された東京大学は、地球と人類社会の未来に貢献する「知の協創の世界拠点」の形成を目指し、改革の動きを加速させています。学内外の多様な人々の協働によって、より良い社会に向けた駆動力を生み出していくためには、共感性の高い社会・経済のビジョンが必要です。東京大学は、この共感性の高いビジョンとして、SDGsを活用することになりました。

SDGsってなんだっけ?

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標

昨今はいろいろな場面で目にするSDGs。国連職員時代にSDGsの策定に携わった井筒先生に、その意義と内容について、あらためて解説していただきました。

「持続可能な開発目標（SDGs）」（2015）は、193か国が一堂に会する国連総会で採択された2016年から30年までの国際優先目標。17の目標があり、169のターゲットと、進捗をモニターする232の指標がある。それらに貫くのは、「誰一人取り残さない」という根本原則。SDGsは、最も周辺化された人々を優先し、格差をなくすことで、様々な社会問題に対処し、持続可能な社会を目指す点で新しい。総会では、国連通常予算の22%を支払う米国も、9.68%を担う日本も、分担率0.001%の国も、等しく1票を有する。すなわち、文化、宗教、経済力、社会システムの差異を超えて、今、世界の国々が合意できる「最大公約数」の方向性を示すのが、総会決議の本質であり、SDGsはこの代表格である。

SDGsは、「ミレニアム開発目標（MDGs）」（2000）を継ぐ形で作られた。MDGsは、バラバラに行われがちであった国際援助に対し、国連と政府のみならず、NGOや市民社会を繋ぐ共通目標・言語となり、世界のリソースを8つの目標に集中することで大きな成果を生んだ。1990年から

2015年までに、栄養不良、幼児・妊産婦死亡率、HIV新規感染数は約半分に減少。しかし、「平均値」の改善を目指す中、一部では格差が増大した。

SDGsでは、分野を超えた連関性、開発途上国と先進国双方への着目、企業や個人を含む市民社会の重要性をめぐる視座を新たに盛り込み、また、不平等解消、防災、平和等に関する新目標も取り入れた。私は、国連職員時代、「精神保健・ウェルビーイング」や「障害者の権利」等をめぐり、SDGs策定に向けた仕事を担当したが、その過程でも、国連機関や加盟国、アカデミア、市民社会や当事者による連携が活発に行われた。

東京大学では、五神総長のリーダーシップのもと、SDGsをめぐる先駆的取り組みが行われている。未来社会協創推進本部では、学際連携、グローバル化、学外パートナーとの協働を強化するための教育・研究環境を推進。教養教育高度化機構国際連携部門では、SDGsを考える授業を開講。学生による提言を作成し、国連に提出している他、国連本部で国連職員と議論を行う集中講義も実施している。学生活動も活発化しており、AIESEC※1がSDGs講

演会を開催した他、UNiTe※2は文化・芸術を通してSDGsを推進する活動を展開。また、工学部と医学部の学生によるEMPOWER Projectの「協力者カミングアウト」は、SDGsの好事例として国連に認められ、昨年、学生が国連本部で招待講演を行う等、広がりをみせている。

SDGs起草過程では、開発の指標として「人の気持ち」を導入できるよう調整したが、叶わなかった。SDGsは魔法の呪文ではないため、インターネットやデータの時代も、人々の共感と、学際的土壌から生まれる新たな知を基盤に人が協働するシステムなしに、その達成はありえない。「誰一人取り残さない」未来の実現のためには、科学技術と、経済・社会システム、そして人をめぐる知を生み出し、それらをつなぐ起点としての大学が大切な役割を担う。

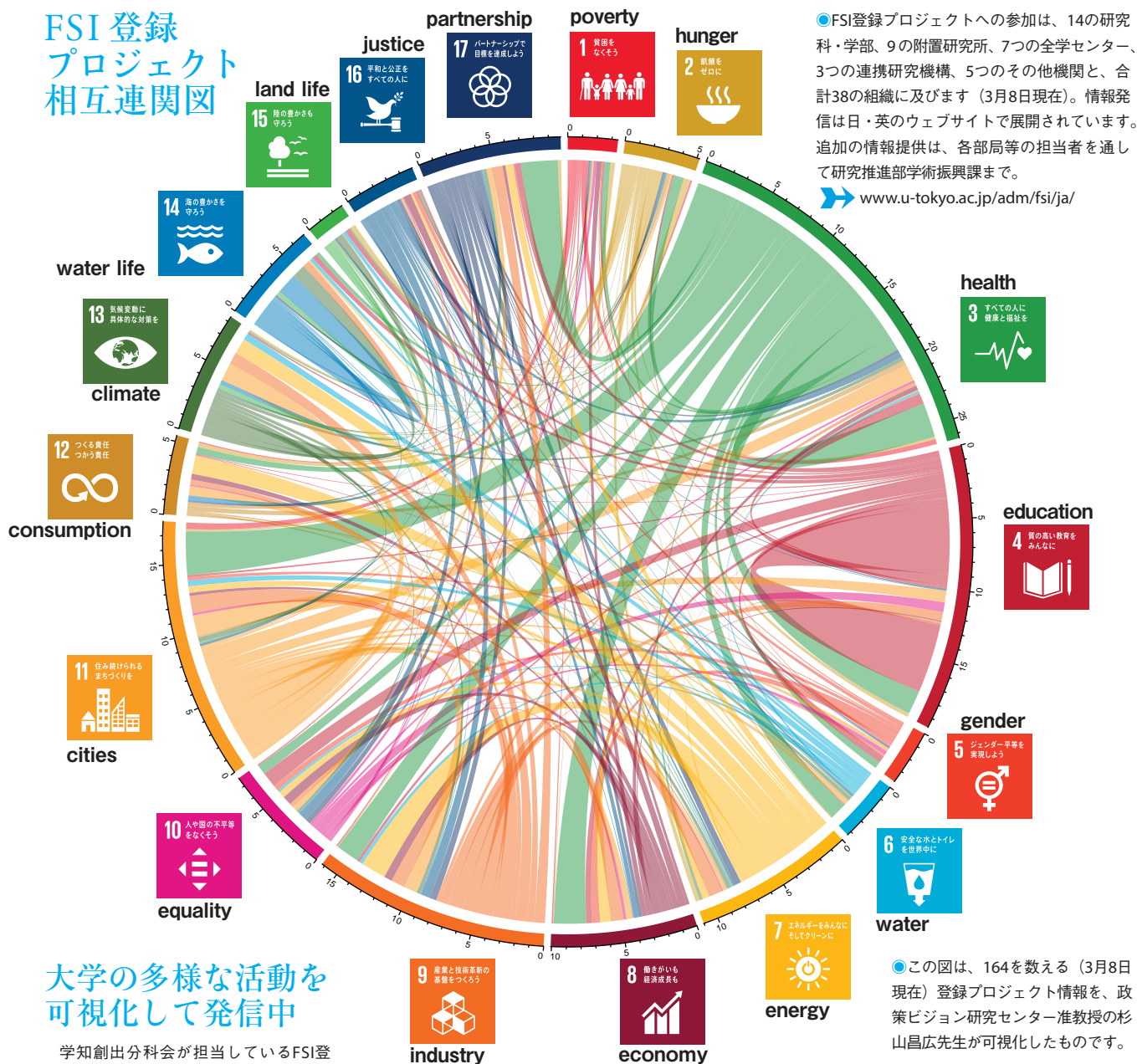


井筒節
総合文化研究科
特任准教授

※1 世界の大学生による非営利教育組織。
※2 全学自由ゼミを機に生まれた学生団体。



FSI 登録 プロジェクト 相互関連図



●FSI登録プロジェクトへの参加は、14の研究科・学部、9の附置研究所、7つの全学センター、3つの連携研究機構、5つのその他機関と、合計38の組織に及びます(3月8日現在)。情報発信は日・英のウェブサイトで開催されています。追加の情報提供は、各部署等の担当者を通して研究推進部学術振興課まで。
www.u-tokyo.ac.jp/adm/fsi/ja/

●この図は、164を数える(3月8日現在)登録プロジェクト情報を、政策ビジョン研究センター准教授の杉山昌広先生が可視化したものです。

大学の多様な活動を可視化して発信中

学知創出分科会が担当しているFSI登録プロジェクト。SDGsの17目標に基づき、東大の多様な活動を可視化・発信し、シナジーと社会的価値の創出に繋げるための仕組みです。登録にあたっては、担当教員が自らの活動と17目標とを結びつけ、一つのメイン目標と複数のサブ目標を設定しています。杉山昌広先生が「R」というプログラミング言語を用いて可視化したのは、全学の多種多様な取り組みが有する、この設定目標同士の結びつきでした。

上の図では、164の取り組みをメイン目標ごとに分け、そこから各々がサブに設定した目標へと帯が伸びています。外周上の目盛りは該当する件数の指標です。healthやcities、educationやindustryに関する取り組みは数が多く、povertyやgender、water、land lifeなどに関する取り組みは少なめなことが外周から見て取れます。一方、円内の帯の色はメイン目標と連動しています。たとえば、3から11に伸びる緑の帯はメイン目標がhealthでサブ目標が

citiesの取り組みを、11から3に伸びるオレンジの帯はメイン目標がcitiesでサブ目標がhealthの取り組みを示しています。healthとcities、climateとenergy、educationとequalityなどは結びつきが強い一方、waterとenergy、povertyとpartnership、justiceとclimateなどは関連が弱いことがわかります。

「地域との関連づけも試したところ、途上国向けより先進国寄りの取り組みが多いように感じました。個人的には1や2あたりも増えるといいと思います。図ではシナジーに重きを置いていて、トレードオフについては見えにくいですが、学内の取り組みを網羅するわけでもありませんが、相互の関連を見てまずはフーンとってください」と杉山先生。総合大学ならではの守備範囲の広さを改めて感じるとともに、異分野同士の新しい結びつきにまで想像を広げられれば、あなたもFSIの一員です。

地域連携の取り組みも可視化



●FSIの連携支援分科会・社会連携タスクフォースが担当しているのが、東大の地域連携の取り組みを地図で一望することができるMAPコンテンツ。すでに公開されている全国各地域との「協定・覚書・申合せ等」に加え、「地域の振興・活性化」「地域医療、地域住民の安全確保等に関する協力」「地域特有の課題の解決」の3テーマも地図上で確認できるようになる予定です。

学生支援プログラムもめきめき拡充中

東大アラムナイ Topics 2017

東京大学校友会は、卒業生・卒業生団体を中心に、在學生、教職員も含む東大全体のコミュニティ。2004年に発足した会は、国内外の10万人を超えるネットワークを基盤に、近年は在學生への支援活動も活発化させています。2017年度に展開した活動の数々から、学生支援プログラムの一部を紹介します。

今年度、新入生歓迎のパーティー企画を始めました。新環境に不安を覚える新入生を食堂に招待し、軽食をサービスしながら、教養学部の先生や若手卒業生が質問に応えるというもの。授業、学生生活、進路選択など、リアルな声を聞ける場として好評でした。

キャリア豊富な卒業生による模擬面接や交流会は、キャリアサポート室と提携しながら行っています。面接演習は、本番さながらの環境を整え、実際の場面を想定して行うもの。就活生を対象に、就活の解禁目前に開催しています。

海外大学院での学位取得を目的とした留学を考える説明会は年2回の開催。海外大学院留学を経験した先輩たちが、志願から渡航・修学のプロセス、現地の生活、文化・金銭事情までを語ります。

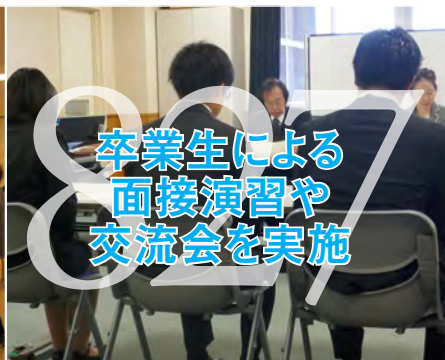
秋の朝食キャンペーンでは、東大校友会が朝食メニューの合計額の半額を負担。生活リズム・食事を考える機会になっています。今年度は平日朝(7:30~8:45)の10日間実施しました。

オープンキャンパスでは、将来の東大生や保護者・引率者のためのフリースペースを提供。キャンパスや住環境の資料、広報冊子等を配布し、ミネラルウォーターもサービスしました。

体験活動プログラムには2012年のスタート時から国内外の卒業生が多様な機会を提供。経験の蓄積により活動が充実するとともに、参加した学生が今度はメンターとして貢献する側に回るなど、活動の広がりが始まっています。



157
新入生歓迎
パーティー
を開催



827
卒業生による
面接演習や
交流会を実施



300
海外大学院
留学説明会
を実施



1433
朝食半額
キャンペーン
を展開



450
オープンキャンパス
で高校生に
場所と飲料を提供



176
体験活動
プログラムに
機会を提供

※数字は参加した学生の数

教職員も対象
のオンライン・
コミュニティ

TFT
~7大特典~

※TFT登録の対象を
拡大しました

- ①u-tokyo.ac.jpのアドレスが生涯使える!
- ②伊藤国際のラウンジが利用できる!
- ③東京六大学野球の観戦チケットがもらえる!
- ④サッカーミュージアムの入場料が割引に!
- ⑤椿山荘や帝国ホテルの優待サービスあり!
- ⑥提携団体・企業の公演チケット優待あり!
- ⑦安田講堂見学会に参加できる!

①卒業生や教職員は「@●●.alumni.u-tokyo.ac.jp」のアドレスを取得して使えます(転送アドレス。発信は不可)。②無線LAN環境を備えたB1のラウンジスペースが使えます(平日9~18時)。③神宮球場で開催される六大学野球・東大野球部の開幕戦チケットが抽選で入手可能です(30組)。④本人だけでなく、家族、友人にも100円割引が適用されます。⑤帝国ホテルの直営レストランほか10%割引、椿山荘の特別プランが利用可、ワシントンホテルが優待価格で利用可など。⑥文学座の公演やおバラやバレエなど。⑦退職後も安田講堂の回廊やホールに入るチャンスがあります。



"UTOKYO VOICES"を讀んでいればわかる連想クイズ15

この先生は誰だ!?

UTOKYO VOICES
www.u-tokyo.ac.jp/gen03/utokyovoices-list.html

UTOKYO VOICESは「現代東大研究者列伝」といべきWeb連載。各部署が推薦した先生たちの人となり伝える、広報戦略本部入魂のコンテンツです。ここでは公開済み(3月2日現在)の原稿15本をもとに連想クイズを作成、連載をPRするとともに先生方の人柄の一端をチラ見せします。続きはWebで!→

4つのヒントから
連想される
東大の先生を
下から選べ

※答は数字に対応しています。

「うまくいくまで
あきらめない」
釣りキチ三平
サッカー
祖父のハサミ
009

「夢を叶える
ために脳はある!」
折り畳み自転車
タツノオトシゴ
イランイラン
010

「温故知新」
「なぜか」を問う
手段より目的
憲法はインフラ
003

「清く、正しく、
美しく」
昭和基地
ピアノの先生
天気図用紙
011

「汝の欲する
ところをなせ」
ミクロの決死圏
レッド・ツェッペリン
猫好き
001

「時間」
睡眠と覚醒
透明
ゴールドの
ノートパソコン
002

「Think Cubic」
代々木競技場
ラグビー
コンパス
008

「人も楽しく
自分も楽しく」
おめでたい人間
調理用ラップの1/10
ぐにゃぐにゃ回路
013

「ありがとう」
まっさら
退院祝いの椅子
大学入試センター
004

「あなたの話は
具体的すぎて
分かりにくい」
ベートーヴェン
BOSEのヘッドホン
一喜しない
014

「図書館に
アイデアを
棺桶に思い出を」
アジアのコンプレックス
ナイジェリア
外交官
012

「過程を大切に」
学生運動
研究は生き方
調査は公共財
007

「大切なこと
はその目で
見えぬもの」
ヘッセ
死者の霊
肖像画
006

「才能より執念!」
東京オリンピック
サイン入りベルト
平滑筋
005

「言葉は人の
外側にあります」
辞書フリーク
ポルチーニ茸
みんなの翻訳
015

A.  野崎 歓 人文社会系研究科 001  上田 泰己 医学系研究科 002  荒井 常寿 法学政治学研究所 003  田中 淳子 高大接続研究開発センター 004  石井 直方 総合文化研究科 005  堀江 宗正 人文社会系研究科 006  石田 浩 社会科学研究所 007  出口 敦 新領域創成科学研究科 008  佐藤 克文 大気海洋研究所 009  池谷 裕二 薬学系研究科 010  佐藤 薫 理学系研究科 011  佐藤 仁 東洋文化研究所 012  染谷 隆夫 工学系研究科 013  水島 昇 医学系研究科 014  影浦 峯 教育学研究科 015

●UTOKYO VOICESでは、2017年度は計35人の研究者取材して紹介原稿を掲載(日本語版掲載の後、英語版も)。その後も定期的に多くの研究者を取り上げていく予定です。

教養教育の現場から

第26回

リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学のすべての構成員がぜひ知っておくべき教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

演劇と音楽を実践と座学の両面から学ぶ

／全学自由研究ゼミナール「教養としての芸術学」

お話し／社会連携部門
特任助教 岡本佳子

——芸術を実践する授業なんですか？
「総合大学で芸術の授業という芸術史や美学などが主で、実践に取り組む例は多くありません。私自身、中欧の音楽や舞台芸術を研究していますが、実践に関してはコンプレックスがあります。でも、創作は芸術を捉えるには非常に有効な方法です。作品をつくってみると、隠れたコンセプトや、材料の選び方や、理論を形にする困難さなどにも気づける。芸術の分析は実践と隣り合わせなんです」

劇作家と音楽家を講師に招聘

「学外の講師を招き、演劇と音楽、座学と実技を合わせた週2回の授業を行いました。講師は、劇作家・演出家の西尾佳織さんと現代音楽作曲家の野口桃江さん。音楽だけ演劇だけでなくリベラルアーツの文脈で芸術に接する先生を招きました」

——具体的にはどんなことを？

「たとえば、感じたことを言葉にする練習です。イデオロギー、コンセント、養老孟司といった言葉を体で表す練習もやりました。それから、作品を見てその意図を質問し合うと、話す際の身振り、手

振り、言葉の選択と人ごとに違いが出ます。質問に応えること自体が演劇的で、何かを発することが芸術の原点である旨を学びました」

——「養老孟司」を表現？難解ですね。

「最後にグループで作品を創作し発表会を行いました。お題は、キャンパスでサイトスペシフィックな小作品をつくる。好きな場を選び、授業で学んだことを養分に、20人の受講者が5組に分かれて演じました。キャンパスプラザの螺旋階段を人生の段階に見立てて年代ごとに自殺したがる男を説得する作品、踏切の人身事故に対する人々の反応を移動しながら描く作品……。死を扱う作品が多くて驚きました」

「音楽では、音楽とは何かという話からジョン・ケージの「4分33秒」という無音作品を野口先生が実演したり、音を聞いて感じたことを体に筆で塗って表したり、楽譜を形として見る練習をしたり、即興演奏を行ったり。最後はやはりグループごとに作品創作と発表会を行いました。お題は自由。ミュージカル仕立

てのもの、録音したフレーズを重ねて繰り返すもの、指揮者の動きに合わせて楽団員が音を出すもの①、朝の海の映像に生音を合わせたものが披露されました」

鑑賞者の反応も芸術の一部

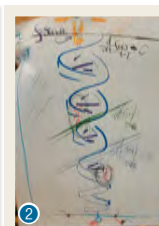
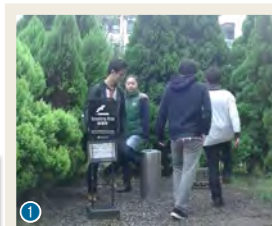
「学生たちは普段と違う思考や表現の回路を使えて新鮮だったようです。演劇と音楽という、言葉を使う芸術と使わない芸術の組み合わせは効果的でした。反省点は、要素を詰め込みすぎたのと、振り返りの時間が少なかったこと。今回は非公開の発表会でしたが、他人の反応が多いとより強い芸術体験ができるので、次は公開発表会もいいなと思っています」

——芸術は面白がるだけでは×ですか。

「何か反応することまでが文化の全体に含まれます。作品に何か言葉を発する行為自体が芸術の要素。相互作用が弱まると全体が細る。自身も芸術の実践にもっと関わりたいと思う契機となりました」



演劇ワークショップより。いくつもの単語(ここでは「筆」)を各々が身体で表現。



①演劇学内発表会より、作品名「3名」。18号館隣の喫煙所にある注意書き「定員3名」に着目して話を展開(ほぼ無言劇)。②演劇発表作品の解説。未来人に音楽をどのように伝えるかを考察。楽譜をはじめとする音楽の伝え方の導入に。③音楽学内発表会より、作品名「れるられる」。

総長室だより

第8回

～ 思いを伝える生声コラム ～

東京大学第30代総長

五神 真



ダボス会議で感じた東大の役割

1月末、スイスに出張し「ダボス会議」に参加しました。ダボス会議は、経済学者クラウス・シュワブ氏の提唱で1971年に始まった「世界経済フォーラム」の年次総会の通称で、今年のテーマは「Creating a Shared Future in a Fractured World」でした。今回はそこで感じたことをお伝えします。

参加の目的は世界27大学の学長が集まるGlobal University Leaders Forum (GULF)でした。このフォーラムでは、社会が激変する中で大学が生き残るためにどうすべきかというやや受け身の議論が中心でした。私たちは、東大ビジョン2020や指定国立大学法人提案において、大学が社会変革を駆動する、主体的で前向きな構想を掲げています。多くの優秀な人材を輩出し、社会作りに貢献してきた東大が、国内外の人材ネットワークを活用して協働のプラットフォームとなり、社会を変える中心的役割を担う、という構想はごく自然なものだと考えていました。しかし、世界において大学の位置づけは確かに多様で、私たちの目標設定はむしろ斬新なのだということに、気付いたのです。

また、GULFのメンバーとの懇談で、シュワブ氏は、AIやIoTやロボットなどの技術革新によって第四次産業革命は確実にやってくる、今議論したいのは、それが人類社会にどのような価値を付加するかだ、とおっしゃっていました。これは、私たちがすでに1年以上かけて議論してきた「スマート化を通じたインクルーシブな社会創り」(1504号参照)と重なります。つまり日本の議論は世界の一步先を行っているのです。

経営者たちによるToward Better Capitalismというパネルディスカッションも印象的でした。資本主義をより良くすることはできるか、より重要なのは長期ビジョンか短期ビジョンか……。ある経営者は、若い会社は長期ビジョンを描いて勝負すべきだが、成熟した会社は短期の成果をきちんと出すことがより重要だ、長期ビジョンに向けた投資を実現させるには株主を納得させる必要があるからだ、と述べました。私はその時、日本の経営者の多くが長期ビジョンを描くことに苦勞していると語っていたことを思い出しました。それならば、多様な時間軸の学知を持つ総合大学が一緒に長期的ビジョン創りをするには意味があると考えたのです。それで始めたのが産学協創です。ダボスでの議論はこの連携の重要性を裏付けるものでした。

各国のリーダーの議論を聞いていると、より良い人類社会創りに貢献したいという目標は重なる部分が多く、東大で続けてきた先進的な議論の数々を、世界に伝えて行かねばならないと実感しました。(つづく)

シリーズ 第12回 連携研究機構

ワンヘルス
連携研究機構の巻



話／機構長
甲斐知恵子先生

ヒトと動物の健康をともに考える

——「ワンヘルス」とは、「一つの健康」ですか？

「ヒトも動物も一つの健康、一つの世界に生きている」という意味です。人獣共通感染症である新興感染症が次々と出現する中で、医学、獣医学、農学、環境学などの学問は個別にはなく、ともに取り組まないと対応できないという考え(2004年「マンハッタン原則」)から生まれました。OIE(国際獣疫事務局)、WHOを始め、多くの国際機関が賛同し、海外ではOne Healthを冠した組織や学部が続々と誕生した一方、日本は大きく出遅れ、2015年に初めて国際会議に参加しただけ。連携して研究を行う場はありません。10年以上遅れた現状に使命感を覚え、機構を提案しました

「また、動物から学べることは多く、遺伝病解明やトランスレーショナルリサーチ(TR)に大きく寄与できることもわかってきました。現在病気の研究に用いられるマウスは、ヒトの病気の一部しか再現できないものが多いです。ゲノム解析が進んだ結果、イヌの様々な病気がヒトと極めて近いことがわかりました。さらに、イヌは伴侶動物として晩年まで大事にされ、癌などヒトと同じ病気を発症し、薬効もゲノムも近い。イヌの病気から多くを学べるとともに、ヒトのモデルになることがわかり、既に欧米で研究が開始されています」

——機構を形成する4つの部門を教えてください。

「One Health感染症部門は、致死性が高い人獣共通感染症が対象。感染症媒介動物・環境研究部門は、感染症を媒介する蚊やダニなどが対象。One Health高等動物疾患研究部門は、ヒトと類似する動物の疾患、特にイヌの疾病を扱います。動物TRセンターは、イヌを使う臨床試験を行える日本初の機関が目標。4部門を中心に、ヒトや動物の感染症流行情報も一元的に伝える機能、そして、若手の育成機能も担う国際拠点としたいです。感染症は医科学研究所と農学生命研究科、ゲノムは新領域創成科学研究科、ヒトとの類似疾患は医学系研究科、教育や情報発信ではOIEとの連携も行い、動物TRは医科学研究所と医学系研究科のヒトのTR拠点が基盤となるでしょう」

——イヌが重要……ワンワンヘルスでもありますね。

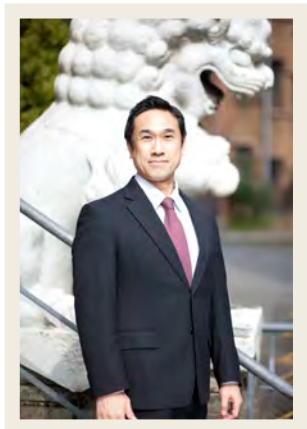
「イヌの臨床試験には、飼い主の理解と協力が重要です。臨床試験には農水省の許可を得る必要もあり、機構の果たす役割は大きいはずですが、まだ足がかりとして機構をつくったという段階です。まずはキックオフシンポジウムとホームページ開設の準備を進めます。機構名を広め、将来はOne Health研究所に高めたい。遅れを取り戻して国際協同にも貢献できる機関とすべく本気で取り組みます。応援してください」

ワタシのオシゴト 第143回

RELAY COLUMN

東洋文化研究所
総務チーム(会計担当)・係長 **山本 太**

会計全般なんでもやっています



東文研の象徴である獅子像の前で。

本郷キャンパスで入口に獅子像の鎮座する建物と言えど存じの方も多いためです。その東文研の職員がこのコーナーに出るのは初めてということで少し研究所の紹介をします。東文研は1941年に設置され、西は北

アフリカを含むアラビア語圏から東は日本まで、北はロシア連邦を含むアルタイ諸語圏から南はインドネシアまで、ユーラシア大陸を中心に広大な範囲の研究を行っているところで。

私はここで会計を担当しており、会計とは言え小さい部局ゆえ予算・決算・執行・給与・施設など、こちらも幅広い業務を行っています。予算資料を作成しながら○階の蛍光灯が切れたと言われれば交換に行き、はたまた決算処理に奮闘している最中にどこそこのトイレが詰まったと言われれば対応に行くという日々を過ごしています。

研究対象及び業務内容が多岐に渡るため、一筋縄では行かない案件にぶつかることもあります。先生方に指導を仰ぎながら取り組んでいます。



協力して仕事をしている会計担当の仲間と。

得意ワザ：ボディビルディング

自分の性格：お酒が入ると誰とでも仲良くなれます

次回執筆者のご指名：管波明子さん(附属病院管理課)

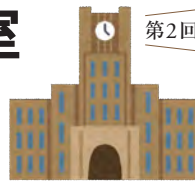
次回執筆者との関係：仕事を一から教えてくれた先輩

次回執筆者の紹介：いつも頼りになるお姉さん

IRデータ室
よもやま話 第2回

新領域創成科学研究科
教授

有馬孝尚



研究の研究とは？

はじめまして。有馬です。新領域創成科学研究科の教員ですが、IRデータ室には、IR担当総長特任補佐、および、研究部門担当の副室長として関わっています。IRの専門家でないことをまず白状したうえで、皆さんが少なからず関心をお持ちの「研究IR」について、少しお話しします。

IRの「R」はResearchの頭文字でそれ自身「研究」という意味です。研究IRは、大学の研究の研究という意味になってしまいます。研究の研究とはなんでしょう？ まず、研究とはどういう作業かを最初から考えてみました。私なりの答えとして、研究とは戦略や仮設に基づいて観測や実験を行ってデータを収集し分析することで新たな知見を得ること、とします。大学の研究の研究の場合、「実験」は執行部の役目でしょうか、IRデータ室は大学の研究に関する観測と分析を担います。このような活動自体は新奇というわけでもなく、科学研究補助金で大学の研究の観測と分析をしている例もあります。

とはいえ、大学の研究の観測と分析は簡単ではありません。よく使われる観測項目として、論文データがあります。この指標を計測して販売する企業が存在し、東大を含む多数の大学が顧客となっています。貨幣とは異なり論文は一本ずつ価値が異なりますので、価値を計測する指標もいくつか提案されています。論文誌の平均価値としてのImpact Factor、論文への興味度やその後の寄与としてのCitationなどです。

「そんなもので測定した気になってもらっては困る」という声が聞こえてきます。その通りです、通貨でさえ価値は変動しますから。絶対的な価値も完全な測定も幻想です。では、観測しなくて良いのでしょうか？ そんなことはありません。観測誤差に常に注意を払いつつ、よりよい観測と分析を目指しましょう。例えば、観測数を増やせば誤差は減ります。一方で、観測には常にエネルギーが必要ですから、そのバランスも重要です。

論文データ以外では、この1年間の活動で書籍データの観測について目途がつかまりました。そのほかの指標について、皆様からのご提案を歓迎します。



↑私のお気に入り

IRデータ室 ir-data.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

インタープリターズ・ バイブル

第128回

生産技術研究所教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

大島まり

オリンピックを支える科学技術

ピョンチャン冬季オリンピックが閉幕した。日本選手団はメダル13個と大躍進であった。また、フィギュア男子では羽生結弦選手が66年ぶりの連覇を達成し、また高木美帆選手が冬季と夏季オリンピックを通じて女子で史上初めて同一大会の金銀銅を獲得したりと、話題に事欠かない素晴らしいオリンピックだった。

今回のオリンピックで大変興味深かったのは、トレーニングや栄養管理などのサポートスタッフや、競技の質向上のためのサイエンスや技術の面など、選手を支えるバックステージにも光が当たったことではないだろうか。選手のインタビューでチームジャパンという形で触れられることもあったし、テレビの番組で取り上げられることもあった。例えば、スピードスケート女子団体バシュートでは、個の能力で劣る日本女子チームがチームとしての力を向上させるために、風洞実験やシミュレーションを用いて空気抵抗の低減や選手交代の効率化を図っていることが取り上げられた。個々の選手の能力を向上させるとともに、チーム力を向上させるためのトレーニングメニューや練習方法を生理学的な観点も含めて綿密に計画をたて、選手の身体的および精神的な面も含めてデータを分析し、フィードバックする。一方、ウェアも空気抵抗を減らすために素材から形までが詳細にわたって検討され、開発された。まさに最先端の科学技術および人材の全てを総動員して作り上げてきた成果が、オリンピックで結実したのではないだろうか。

次なる高みを目指して、技と記録への新たな挑戦がはじまる。私は幼少時代にフィギュアスケートを習っていたが、その当時は世界のトップレベルでも3回転を跳べる女子選手は数えるほどであった。今では、女子は3回転のコンビネーションが当たり前であり、男子は4回転から5回転への挑戦が始まっている。そして、人間の身体能力はどこまでのびるのだろうか。飽くなき挑戦が科学技術を発達させ、その発達がさらにスポーツを進化させる。しかし、科学技術はなかなかスポットライトが当たらない裏方になりがち。そこにちょっとでも光が当たり、目を向けてもらえることは、研究者としてとても嬉しい。

科学技術を制する者が、オリンピックを制すると言っても過言ではないだろう。2020年の東京オリンピックの開催まであと2年。科学技術の進歩とともに、どんなドラマを東京オリンピックで見ることができるのだろうか。楽しみである。

science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp

救援・ 復興支援室 より

第70回
(最終回)

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

救援・復興支援室の活動(2~3月)

2月	岩手県陸前高田市「学びの部屋」学習支援ボランティア
3月	第32回救援・復興支援室会議、東日本大震災被災地スタディーツアー、福島県大熊町学習支援ボランティア

ザシキワラシの日常④④

本部企画課係長(遠野分室勤務)



文：佐藤克憲

東日本大震災発生からまる7年が経過し、当分室もこの3月で閉室となります。本学が震災の年の5月に岩手県遠野市へ拠点を置いてから6年10カ月余り。以前も本コラムに記しましたが、これだけの期間直接的な支援を続けてきているところは地元の組織以外ではごく少なく、改めて本学の底力を感じています。

もっとも個人的には、被災地の沿岸部出身ではないながらも、少しでも出身地である岩手県の復興の力になりたいという思いからこちらへ来たものの、復興に貢献できたという実感は最後まで持つことができませんでした。基本的な業務が、復興支援活動を行う本学構成員の“サポート”であることから仕方ないという見方もできますが、まれに直接的に復興の力になれそうな案件があっても、組織として動く上での制約や自身の力不足もあり思うようにはならず、無力感を感じ続けた遠野での4年9カ月でした。

そのような私でも、曲がりなりにも最後まで業務を遂行できたのは、遠野市をはじめとする関係自治体・組織の皆様の御厚情と、本学の救援・復興支援室関係者の皆様のサポートのおかげでして、それぞれの皆様には衷心より御礼申し上げます。

救援・復興支援室は来年度から「東日本大震災復興支援室」として、支援の全学体制を維持しつつ、被災地域に拠点を置いた後方支援から、学術成果を被災地の復興に還元する自主的な活動を全学で支援・促進する体制へと移行します。新体制に対しても引き続き皆様の御支援・御協力をお願いいたします。

そして、現時点でも復興が道半ばであることは間違いありませんが、この1年で復興が進んだことを実感できる状態となった岩手県の沿岸被災地にも是非足をお運びください。

今までお読みいただき「オアリガトガンス!」。



(左)解体工事が進む遠野東大センター(2018.3.8現在)。(右)大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター新棟(大槌町)。

トピックス 全学ホームページの「トピックス」に掲載された情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
2月9日～ 3月6日	広報戦略本部	バイオリギングを世間の常識に。／「やってみよう！」が切り拓く、脳科学の地平。／「丁寧に、粘り強く」チャレンジを続ければ成果は出せる。／「資源という可能性の束」の先にあるもの。／「より小さく」ではなく「柔らかく」。電子部品の新たな可能性を開きたい／「考え方」を発見する。／言葉は人の外側にある。／有機物と人のダイバーシティで夢を叶える。(UTOKYO VOICES)	11月21日 ～2月6日
2月16日	教育学研究科・教育学部	「まちの保育園・こども園」と東京大学大学院教育学研究科との保育・教育・研究交流連携事業に関する協定調印の報告	2月4日
2月16日	史料編纂所	画像史料解析センター設立 20周年記念・公開講演会「画像史料の語る日本史」を開催	1月27日
2月19日	工学系研究科・工学部	藤田誠教授(工学系研究科応用化学専攻)が国際的に権威のあるウルフ賞の化学部門を受賞することが決定しました。	2月12日
2月21日	教育学部附属中等教育学校	第19回公開研究会兼研究開発報告会開催	2月17日
2月22日	大学総合教育研究センター	東京大学フューチャーファカルティプログラム 第10期 履修証授与式	2月20日
2月26日	国際本部	国立台湾大学との合同ウインタープログラム	2月1日
3月1日	低温センター	第9回低温センター研究交流会開催報告	2月20日
3月8日	本部学生支援課	平成29年度 体験活動プログラム報告会開催	2月28日

お知らせ 全学ホームページの「お知らせ」、「イベント一覧」でご案内しているお知らせを一部掲載します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル	URL
2月16日	附属図書館	総合図書館中央部分のサービス再開と臨時休館のお知らせ	https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z1901_00005.html
2月21日	本部広報課	退職教員の最終講義(3月開催分)	https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z1304_00045.html
2月26日	本部広報課	平成29年度退職教員の紹介	https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z1304_00046.html
2月27日	総合文化研究科・教養学部	駒場博物館所蔵品展「中国の金属工芸品」	https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/events/events_z0109_00111.html
2月28日	広報戦略本部	国際科学コミュニケーションイベント Falling Walls Lab Tokyo 2018	https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/events/events_z0531_00001.html
3月1日	本部博物館事業課	特別公開『モダンの曙——幕末明治ニッポンの面貌(かお)』	https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/events/events_z0301_00077.html

CLOSE UP 広報誌「淡青」36号発行(広報室)

東京大学が丹精こめて年に2回発行している広報誌「淡青」の最新号がこのほどできあがりました。

今号の特集は、UTokyo 3.0突入記念「タイムラプス」スペシャル、「画像でたどる東大140年」です。70年を1単位とすれば、UTokyoは第3期に入ったところ。来し方を振り返るにはいい頃合いでしょう。そこで本特集。学内に蓄積された画像類の数々をピックアップしてテーマ別に整理して提示し、140年

間の変遷を視覚的にざっくりたどっていただく、という趣向です。門、建物、記念碑、銅像、構内図、部局のロゴ、文書館所蔵の歴史的グッズ、五月祭パンフレット、硬式野球部のユニフォーム……。大学の歴史に一言ある先生方が過去から未来を見わたしながら語り合った座談会録は必読です。

文は最小限。画は最大限。ドンと見据えて、Don't miss it!



平成30年度 学内広報 配布スケジュール	1509号 4月27日	1510号 5月31日	1511号 6月29日	1512号 7月31日	1513号 8月31日	1514号 9月28日
※別冊発行に伴い号数は変わることがあります。	1515号 10月31日	1516号 11月30日	1517号 12月25日	1518号 1月31日	1519号 2月28日	1520号 3月29日

CLOSE UP

藤田誠教授のウルフ賞受賞が決定しました

(工学系研究科)



2月12日、ウルフ財団（イスラエル）が2018年のウルフ賞受賞者を発表しました。今年は農業、化学、物理、数学、芸術の5部門で9名が受賞することとなり、化学部門では、工学系研究科応用化学専攻の藤田誠教授とカリフォルニア大学バークレー校のOmar M. Yaghi教授が共同で受賞することが発表されました。

ウルフ賞とは、1976年に設立されたウルフ財団が、化学、農業、数学、医学、物理と芸術

の5～6部門で優れた業績をあげた科学者および芸術家を選び、1978年から授与している賞。国際的に権威が認められており、ノーベル賞の行方を占う賞の一つとして知られています。ウルフ賞化学部門での日本人受賞者は、野依良治名古屋大学特別教授に続き、藤田誠教授が史上2人目となります（授賞式は5月にエルサレムで開かれる予定）。

受賞決定、おめでとうございます。

CLOSE UP

画像史料解析センター20周年記念・公開講演会を開催

(史料編纂所)



↑会場の様子。
→講演会チラシ。



史料編纂所附属画像史料解析センターは、1月27日、農学部弥生講堂一条ホールにおいて、設立20周年記念公開講演会「画像史料の語る日本史」を開催しました。同センターは、絵巻・屏風絵・錦絵・摺物や地図・古写真などの画像史料、画像から得られる情報を研究対象として、1997年に設立。講演会は、画像史料研究の最新事情と面白さをわかりやすく発信し、社会に成果を還元することを狙いとして開催しました。

講演会では、山口英男センター長の開会挨拶の後、須田牧子助教「『倭寇図巻』研究の現在」、金子拓准教授「長篠の戦い—いかに描かれたか

／いかに描くか—」、杉本史子教授「世界と空間を描く—江戸時代、表現する人々—」、保谷徹教授「古写真ガラス原板にみる幕末・明治の日本」の4本の講演が行われ、山家浩樹史料編纂所長の閉会挨拶で締め括りました。

当日は約250名の来場者があり、会場はほぼ満席となりました。来場者からは「講演の内容がよく理解できた」、「知的好奇心が満たされた」、「学術的とはこういうことかとおかった」、「同種の講演会を今後も開催してほしい」といった声が寄せられ、アンケート結果によると来場者の平均満足度は84%と極めて好評でした。

CLOSE UP

体験活動プログラムの報告会を開催

(本部学生支援課)



↑挨拶を述べる五神総長。
→当日は15名のプログラム参加学生が司会、受付などの役割を担いました。



2月28日、工学部2号館にて体験活動プログラム報告会を開催しました。プログラムに参加した学生、学生を受け入れた学外関係者及び本学教職員等約110名が出席しました。五神真総長の挨拶の後、プログラムに顕著な功績があった団体をたたえる「特別功労賞」の授与が行なわれ、釜石リージョナルコーディネーター協議会様、三重県玉城町様、東京大学三四郎会様、兵庫県明石市様、株式会社Prima Pinguino様、シカゴ赤門会様が受賞されました。続いて、教育学研究科の大久保圭介さんがプログラムの効果・評価に関する報告を行った後、5つのプロ

グラム（「花巻市大迫町でトライアルステイ〜ぶどう栽培体験から考える課題解決の突破口〜」、「オーガニック農場でのSustainable Agriculture 体験（米国）」、「地域イートコ発見プロジェクト〜フィールドワークから学ぶ地域の健康〜」、「被災地福島島の農業と環境放射能を知るツアー」、「聖地熊野の歴史文化と自然を体験しつつ、新宮市の文化行政を学ぶ」）に参加した学生が、活動から学んだことや将来に活かしたい経験等について報告しました。報告後には、学生を受け入れていただいた関係者から感想やメッセージを頂戴しました。最後に石井洋二郎理事・副学長より関係者への感謝の言葉が述べられました。

平成30年度合格発表掲示より

3月10日、合格発表掲示が行われ、本郷キャンパスが歓喜に包まれました。安田講堂前では応援部のお祝い演舞と学生有志&イチ公による歓迎パフォーマンスが展開され、祝賀ムード一色となりました。特に運動会の学生らによるハイタッチ花道では、テンションMAXの合格者が続出。新しい歓迎スタイルとして定着しそうな雰囲気がいっぱいでした。合格者の皆さん、おめでとう！





節目を祝うということ

太閤豊臣秀吉による朝鮮出兵が開始された年にあたる文禄元年（1591）12月25日、朝廷では、ひとりの老公家の90歳を祝う宴がはなやかに催された。名は勸修寺紹可（俗名尹豊）。勸修寺家は代々天皇に近侍する実務的な職に就いた中流貴族である。

宴は年齢にちなみ90首の和歌が寄せられるなど盛況のうちに運んだ。廷臣の90歳を賀す祝宴が設けられたのは、千載和歌集の編者としても知られる藤原俊成卿以来のことだ、と『長壽院内府九十賀記』は記す。

90歳の賀は現代では卒寿とされる。60の還暦、70の古稀、80の傘寿のように、年齢の数の節目ごとにそれを祝う人生儀礼はもともと中国由来であり、わが国では奈良時代頃からすでにおこなわれていたという。

まっすぐ流れる時間を（昔ならば）太陽の動きに応じて循環的な「年」という単位に分節化し、値を数えて表現するため十進法をみ出す、という人間の世界把握のあり方が、こうした節目の祝の発生を準備したと言える。それでは、人間の年齢ではなく、ある人間集団・組織や、あるできごとの年数的な節目を祝う考え方は、どこから生まれてきたのだろうか。

というのも今年2018年は、1868年の明治維新から150年の節目、いわゆる「明治150年」にあたっており、日本史の研究所である筆者の勤務先史料編纂所でも、その風潮にまったく無関係ではないからである。

できごとの節目を記念するこうした営為は、近代的発想なのだろうか。そんな疑問に答えてくれそうな催しが学内であったので、聴きについてみた。人文社会系研究科文化資源学

研究室主催のフォーラム「周年の祝祭」である。講演者の一人京都大学の佐藤卓己氏によれば、こうした行事は「過去の道具化」なのだという。ただその目的で完結せず、この機会に過去を自省する必要があるともいう。

「周年」を祝う重要な意義として求められるのは、それを契機として（ある意味他動的に）来し方をふりかえり、その反省を未来へ活かす、ということにあると言えよう。

本学は2027年に創立150年を迎える。それにあたり『百五十年史』編纂に向けた動きが始まった。いっぽう史料編纂所に関わることで言えば、1869年、明治政府は国家の修史事業のため史料編輯国史校正局を設置し、明治天皇は三条実美を同局の総裁に任じた。来年2019年が、近代国家としての日本が自国の歴史を編む事業に着手してから、150年の節目となるわけである。

史料編纂所は史料編輯国史校正局の後身である。以来方針を変えながら、日本史の史料集を編む仕事が営々とつづけられてきた。本学ともども、これら節目にあたっていかに自省し、いかなる課題を未来に提示することができるだろうか。

ところで筆者は昨年、生誕50年の節目を迎えたが、来し方を反省し未来へ向けて目標を定めるといった余裕もないまま、うかうかと一年を過ごしてしまった。そんな人間が、「節目を祝う」意義をえらそうに論じていることをお許しいただきたい。

金子拓
(史料編纂所)